

STAGE

AMUSEMENT SQUARE

演劇空間「スペースベン」

こだわらなければ続かない

〈文/スペースベン代表・田中勉〉

八戸市内に拠点を置く「モレキュラーシアター」という劇団がある(代表高沢利栄)。今年三月にアテレード芸術祭(オーストラリア)に招待され、「ファサード・ファーム(顔の演劇)」という作品を計9ステージ行ない、その後メルボルンでワークショップを行なう。このアミューズが発刊される頃

には公演を終え、帰八している頃だろう。実はこの私も、音響のスタッフとして参加させていただいたのである。その他にも、ダンス・リセ(豊島舞踊研究所、劇団イージーシアター我楽多屋、創造集団パノラマ屋(株)アイズのメンバー)が参加しての海外公演である。

国際交流基金の助成を受けての招待公演とは言っても、全額それで賄えるわけではない。自らの企画を実現させる為に、自らの持ち出し金があるのは当然と言えば当然のことのようではあるが、その労力たるや並大抵のことではない。事実、そのために潰れていく団体も多いのである。いい意味での作品へのこだわり、文化へのこだわりがなければこうした活動を継続していくことは難しいことと思う。

演出の豊島重之氏と話しをしていると、いつも思うことがある。

八戸と東京と海外にこだわらない、なにげなき

こだわらないが故に八戸にこだわることになげなき

アマチュアというものへこだわる

なにげなき
……等々。

「なにげなき」という表現が適切かどうかは分からないが、先月号のこの紙面に、山田景子さんが書いていたように、文化不毛と言われることにさえも慣れてしまった八戸事情の中で、何ができて何ができないのか? 豊島重之氏の活動は、一足飛びには改革はできないかもしれないが、着実に根付いてきていることは否めない事実であろう。種の植えつけにも、サケの放流にも似ているこの作業は、現在社会問題にもなっている「教育とは何か」「人を育てるとはどういうことか」ということに通ずるところがあるような気がするのである。

いい作品の「いい」ということと、駄作の「よくない」ということの意味を今一度見つめ直して、誤解を恐れず言わせて頂ければ「駄作を送り続けるファンズ」の位置を維持していきたいと思っているところである。

「能ある鷹は爪を隠し」謙虚さを武器にして公演を打っていくのではなく、「能ない鷹は爪を研ぎ」ある種の攻撃性をもって行動するファンズでありたいのである。

スペースベン 今月の予定

今月の番組(料金は全て500円)

●4月5日、12日、26日

題名…ひまな人 VOL・6
時間…夜7時30分
出演…田中 勉
※各日によって内容が多少かわります。

●4月19日
題名…suicide
vacationほか

時間…夜7時30分

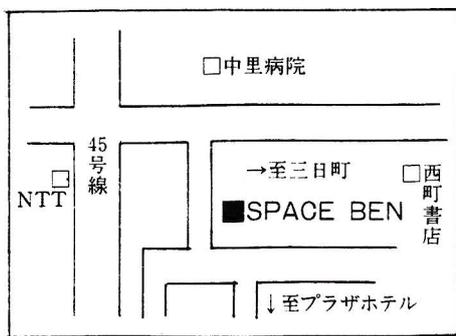
作・演出…鈴木利典

※2月に続いての八戸高校演劇部による番外公演です。

昨年の11月からあるテーマを設定したマンスリー月間として公演を続けてきましたが、4月は偶数月ですので私(田中勉)の一人芝居を基本として、間に八戸高校演劇部の公演をはさんでお送りします。

〈問い合わせ〉

〒031 八戸市柏崎一―一―八
TEL&FAX 0178(43)9876



車での来場はご遠慮下さい(近くに西町書店駐車場有)

▶「患者の楽園I」96年1月5日

